

ともの家 だより

令和3年5月 第64号

発行 社会福祉法人ともの家

＜いかに障害が重くとも尊厳ある生活を保障する＞

寄稿 関係者・職員の方から寄せられた文章をご紹介します。

先日、ふとした縁で故・永和良之助理事長を知る方に出会いました。大谷敏江さんは詩人でもあり、『悲しみをわかちあえますか：高齢者の人権と福祉』（永和良之助著 創風社出版, 2003.11）に感銘を受けたと言われていいます。雑誌「詩人会議」に掲載された文章より抜粋させていただきました。

一介の他者として

白石 小瓶（大谷敏江）

私は若い頃に障がいをもつ一人の女性と出会い、そのお宅でのボランティアがケアに携わるきっかけとなりました。やがて訪問介護やグループホームなどを経て、今はデイサービスで人生の大先輩である老人の方々と関わらせていただいています。

介護現場でよく思うのは、人は訪れを待っているということです。それは他者の訪れであり、言葉やぬくもり、眼差しの訪れであります。人間は、お互いに他者というべつのものであるゆえにどこまでも寂しく、だからこそたえず新しい訪れとなり、出会いを生むことができる。お年寄りとのやり取りのなかで実感します。その手ごたえを存分に味わえるのが介護の仕事かもしれません。

夜勤業務で迎える夜明け、朝食を温めながら、久しぶりのような面持ちで居室を訪れ、起床を手伝います。安息の時間となるはずの夜は、ときに寂し

さや痛みをもたらす孤独の闇でもあります。お名前を呼びながら、長い夜を越された労をねぎらいます。「朝か、起こしてくれるか。うれしい、うれしい。」と笑顔を見せる婆さまとは、いつも抱き合ってスキンシップ。夜中も巡回やオムツ交換で何度も顔を合わせるのですが、共に闇を潜り抜けた朝の出会いは格別でした。繰り返す同じ挨拶と所作ですが、そのたびに新しい意味を放ち、熱をおびるのだと実感する瞬間でした。

またデイサービスでのことです。私はある作業時に思いつき、一人の婆さまに「針に糸を通してくれますか。」とお願いしました。洋裁の女学校を卒業した方です。いつも、もう手作業はこりごりと言いつつ、のんびり過ごすその人は、この時「何、そんなことくらい」と得意げに糸通しを始めました。苦心されるので太めの針に替えると、すぐに糸は通りました。驚いたことに、そこから彼女は、堰を切ったように思い出を語り始めたのです。洋裁学校で誤って針を踏んでしまい、級友におぶわれ病院に行ったこと、〈英霊〉を出迎えるため駅への召集があり、授業を中断したこと・・・こちらの促しをきっかけに、糸通しに集中するうち過去の記憶が甦ったのでしょうか。私は全身でその人の話に聴き入りました。前のめりで繰り返される言葉の数々は、時代を越え、今を生きる人の熱そのものであり、私の内なる熱に溶け込むのでした。

介護に必要なのは、立派な〈資格〉を持つことより、〈自覚〉を持つことだと思っています。それは自分が言葉や眼差し、持てる力をお年寄りに差し出すための〈一介の他者〉であるという自覚であり、自分もまた老いていく者であるという自覚です。介助に必要な生活行為を、一番近い他者として共に担い、同じ目線で同じ痛みを共有する。生きることそのものを協働する喜びがそこにあります。その人が生活の主体者としてその人らしく生きるために自分がひとつの訪れとして用いられる時、疲れも忘れ、関係性の中で躍動するいのちの実感を得るのです。

差し出すことで他者の営みに与り、他者の生きざまの内に何かが実る手応えを知る・・・言葉に表しようのないその感動をどうにか表現しようとする衝動から、私は詩を書かずにいられます。そうして生れる作品が、どこかで読んで下さる人に、よきものを取り次ぐものとなるとしたら、とてもさいわいなことです。

ケアという言葉はラテン語で〈カーラー〉といい、〈哀しみをともに背負う〉という意味があるのだと、ケアに携わり始めた頃、書物で読んだ記憶があります。老いの途上にある方の哀しみに、自分の内にもあるはずの哀しみをもって訪れ共にありたい。また言葉にならない真実なものをあえて言葉で掴みだそうとする詩という表現の力を借り、誰かのよき他者となってゆきたい。そのためにもあらゆるところで哀しみを乗り越え生き抜く人びとと手を携えようとする共同体の中で、学びつつ励みたいと思います。今後ともご指導をよろしくお願いいたします。

(紙面の都合により、一部改訂・抜粋させて頂きました)

三十一文字に思いを託して

職員 末廣 美和

高校生の頃、国語や古文の授業はひどく退屈で、いつも寝ていた。

半世紀以上生きてきて、実に多くの出来事があった。様々なことをカタチにしておきたい、という気持ちが芽生え、それが短歌になった。三十一文字に思いの丈をこめている。全くの自己流であるが…。

人生浪人(!)をしていた息子は将来の夢を見出し社会人として巣立っていった。

満開の桜に前途洋々の君巣立ちゆくことの淋しさ

入院中の父の食事介護をした帰省時のこと。食べるのが大好きだった父は、ミキサー食をいとおしむように食べていた。

病室の静寂破る音ゴクリ父の喉元命の一匙

そして、コロナ禍…。一年前はその正体もわからぬまま不安な日々が続く。

じわじわと感染リスク増す不安終息祈る沈黙の春

世界はいまだに混沌の中にあり、ウイルスは変異し、感染拡大に歯止めがかからない。それでも、花は咲き鳥は啼く。自然の営みのありがたさが心をうるおす。

きらきらの光のシャワーふりそそぐ車窓の景色はスーラの絵のごと

スーラは19世紀のフランス人画家。「グランドジャッド島の日曜の午後」で知ら

れる。「光の魔術師」とも呼ばれているとか。通勤時、石手川沿いの風景を詠んだ。
いま誰もががしんどい思いをしている。できることを考え手探りしながら生きている。皆が希望の光を手に入れる時が来ることを信じている。

.....

前回のともの家だよりを読んで

職員 宇都宮 歩

ともの家だよりを毎回読んでいつも思う。思い出す…M・Hさんという利用者の事を。随分昔、まだ、私が、20代後半だった頃、携わった利用者だった。まだ担当でない3月の年度末に、近くの池に足をチェーンで巻いて自殺未遂をした事で居室替えをし、4月から担当になる事になった。先輩介護員と2人、日勤勤務で月曜日から金曜日まで毎日顔を合わすことになった。私の担当する利用者は40名いた。毎日忙しく、Mさんに対して特別何かをした覚えはないが、Mさんとは私の家族の話とかをよくしたように思う。たまに仕事をさぼるようにMさんの部屋に隠れさせてもらって少し話をし、「ありがとう」と言って仕事に戻った事もあった。いつからかMさんが売店で買ってきたお菓子を私の子どもに「持って帰れ」と持ってくるようになった。利用者からは絶対食品をもらってはいけない事になっていたので、先輩介護員に相談し、事務所の了解も得て受け取る事となった。（お菓子はおやつを買えない他の利用者にあげる事にした）そんなやり取りが数回あった。

何事もなく一年が過ぎ、新年度の4月異動でMさんの担当を外れ、違うところの担当になった。しばらくしてMさんがお菓子をもって私に会いに来るようになった。担当が外れたのに、わざわざ私が勤務する隣の棟まで歩いて来てくれたのはすごく嬉しかった。でも新しいMさんの担当介護員は定年前のベテラン介護員で、担当の外れた私の所までお菓子を持ってくる事にとまどった事も覚えている。とまどうというより、本当は心の中でその先輩介護員に嫌味を言われる事を私は恐れた。だから次にMさんが来た時に「私は担当を外れたのだから今の担当の人にあげて」と断ってしまった。（この事を私は一生後悔する事になった）

何日かして、Mさんがいなくなった。どこかへ行ってしまい行方不明になってしまったのだ。仕事が終わって、夜、何度も車で捜しまわった。そして、最悪の結果になった。山の中で半分腐敗した形で見つかったと連絡があった。

介護の仕事に携わってきた中で、この時一度だけ本当に介護の仕事を辞めたいと思った。何故、Mさんは自殺してしまったのか。私があの時お菓子を受け取っていたら…身寄りもない一人ぼっちなMさんが、今思えば、何気ない会話を心から喜んでいただけではないか。「ありがとう」と言ってもらえる事にMさんは自分も少しは誰かの役に立っていると思えていたのではないか。

文句ばかり言っている利用者より、何も不満はありませんという利用者の方が本当は心の中では大きな不安を抱いているように思う。この私でさえ、誰かの役に立っているのだろうか。仕事をしていて、ともの家の役に立っているのだろうか。私みたいな介護員はいらないのではないだろうかと日々思うのだから、年老いた利用者ならなおのこと、生きていていいのだろうか、誰かの役に立ちたい！！と思っていると思う。二度とM・Hさんのような悲しい人生の結末にならないように利用者の人生に携われるよう毎日模索していきたい。

職員リレーエッセー ⑧

職員 曾我部 涼子

ご挨拶が遅れた方もいらっしゃるかと思いますが、11月に入社した曾我部涼子です。改めましてよろしくお願ひします。

私の経歴はグループホーム4年、サ高住1年半です。前職のグループホームでは利用者様が食事作りのお手伝い、食材の買い出し、ドライブにも同行したりと楽しく過ごさせて頂いておりました。サ高住では利用者さん全員交代で併設のデイサービスに行かれたり、勤務も毎回違うフロアであったりと何かとめまぐるしかったです。

今回、再びグループホームで勤務することができました。やはり決まったユニットで顔なじみのスタッフが対応するユニットケアが利用者様にも働く側にも馴染みやすい、安心感があると感じました。ともの家は今までのどの法人よりもケアが手厚く転職してよかった、もっと勉強させて頂きたいと思



えました。ともの家の皆様、今後ともよろしく願いたします。

介護ひまなし日記 ⑧



永和 里佳子

井谷昭先生は、ともの家になくってはならない存在だ。

2000年溝辺町にグループホーム「溝辺ともの家」ができた時、協力医療機関になっていただけないかお願いにあがったのが井谷内科だった。臨床経験に富み、冷静かつ温かみのある診療をされる先生を近所の人たちは慕っており、皆に恐れられる入居者Mさんも井谷先生の顔を見るとニコニコしてお追従を述べていた。その後「ともの家湯の山（のちに移転して「この道」に改名）」「アンジュールともの家」とグループホームが3か所に増え、2008年には新たに小規模多機能ともの家が開設した。長年にわたり往診し入居者をサポートくださっていた先生もついに医院を閉じることになり、先生の申し出で井谷内科を改築してできたのが「小規模多機能 第二ともの家」だった。第二ともの家は他の事業所と少し離れていたが、先生のおかげで心配がなかった。閉院してからも先生は“ご近所さん”として運営推進会議に出たり、調子の悪い利用者の様子を見に来てくれたり、ともの家の理事を努めてくださったりしていた。その後サテライト型小規模多機能「ともの家吾も紅」が隣にできて第二ともの家は「高齢者住宅 第二ともの家」となったが井谷先生は利用者を紹介して下さったり、吾も紅が近所の方向けに取り組んだ“地域講座”の講師を務めてくださったりと相変わらず活動に協力して下さっていた。

その井谷先生が、昨年10月脳出血で倒れられた。危機を脱して転院し、リハビリを続けておられたが年末私のもとに“帰りたい”という先生の言葉が届いた。「まだ1か月は出血の様子を見た方がいいと担当医は言っている。無理して帰って正月休みの間に何かあったらどうしますか、そちらで対応できるのですか」相談員に言われて返答に窮した。だが、家に帰りたいというのが先生の希望であればそれを叶えたいと思った。病院のカンファレンスで先生は言われた。「こちら（吾も紅）がすぐ隣にあるから私たちは全く困らな

いのです。」私もできるだけことはします、大丈夫ですと答えた。そうして先生は帰ってこられた。退院の日に寿司を作り吾も紅でささやかなお祝いの会を開いた。“おかえりなさい”皆が心から先生の帰還を祝った。先生は、病気を患ったかもしれないがそれゆえに利用者になるのではない。少し不自由なところがあった、ただそれだけだ。

先生が来られたことで吾も紅のケアは完成された、そんな気がしている。つまり、利用者と非利用者という垣根はない。職員も利用者と呼ばれる方もみんな同じ地平で暮らしていて、日々の延長上に関係性ができる。何か困ったことがあれば助け合う、しなやかな共同体でありたい。

正直、“何も起こらない”確率は五分五分だった。だが先生が信頼してくれた、その信頼に私は応えた。介護事業者としての判断としては誤りかもしれない。でも、介護という職業は、ときに決められた範を超えて一個人として、人対人として、相対することが必要なのではないだろうか。「覚悟」と呼んでいいかもしれない。他人の人生に責任を負う。その重さから逃げない覚悟。そうでなければ介護など到底できないと思う。人はだれしも老い、衰える。その過程で弱り混乱することもある。不運にも弱り切ったときに出会ったとしても、目の前の人の背後には長い歴史があり大切な人がいることを想像し、共感することが大切だ。私たちを選んでくれ、もっと深く知り合えることを感謝したい。そうして私たちは他人の人生を生きることができる。なんというありがたい職業だろう。みんなが他者について寛容な心を持ち、老いること、弱ることを恐れなくて生きられたらどんなに良いだろうか。あなたは私である。そう思いながら毎日を過ごしている。

愛読書紹介

職員の皆さんに「愛読書」を紹介していただくコーナー。好評につき第三弾です。

「眼球綺譚」（綾辻行人、集英社文庫、角川文庫）

推薦者：職員 土手内 洋子

本棚を見つめ、「どれにしようかな～」と選ぶトコからはじまりはじまり。持ってる本は大体どれも好きでオススメなんですけど、その中でも個人的にすごく大好きな小説があります。コミカライズもされたことのある綾辻行人さんの「眼球綺譚」という初の短編集、本の帯に著者自身の言葉として、「読んでください。夜中に1人で」と大胆なメッセージが記されています。（笑）



この作品集は、「恐怖」をテーマにした7つの短編からなるミステリーテイストのホラーで、7編すべてに「由伊」という名の人物が登場します。でも同一人物ではなく、話により年齢も性格も見た目もそれぞれ異なり、どの作品にもリアリティのある日常表現の中に非日常が入り込んでくるような怖さを感じます。著者が江戸川乱歩や榎図かずおに影響を受けた…というだけあって、グロテスクな中に幻想的なものも含む独特な世界観を持った、理性的で異様さを感じるタイプの作品集になっています。

中でも「特別料理」という短編がお気に入り、変わった物を食べることに異様なまでの喜びを感じる主人公とその妻が「YUI」という名の特別料理専門のレストランにハマっていく話なんですけど、料理名や解説が妙に生々しく、想像すると気持ち悪くなると共に主人公がそうした食癖に目覚めるキッカケとなったエピソードに現実味を感じたりしてしまう…。

一冊まるごと読み始めたら止まらなくなります。

「ぜひ、読んでください。夜中にひとりで（笑）」

※紙面の向上のため、今後も皆様からたくさんの感想をお待ちしております！

編集後記 前回のともの家だよりを読んで、「どの記事もしんどかった」という感想が寄せられ編集者として反省している。狙ったわけではないが、今回はコロナに終始しない多方面にわたる記事がそろった。やはり紙面は「読者が作る」に限る。（里）